The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<書評会報告>三木英著『宗教と震災ー阪神・淡路、東日本のそれから』書評2
Author(s)	齋藤, 知明
Citation	宗教と社会貢献. 2016, 6(1), p. 83-90
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55541
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

書評会報告

三木英著
『宗教と震災―阪神・淡路、東日本のそれから』
森話社、2015 年 10 月、四六判、251 頁、2,600 円＋税

齋藤知明*

1. はじめに

1995 年の阪神淡路大震災と 2011 年の東日本大震災。現代日本の代表的な 2 つの震災において宗教者・教団は何をしたのか。あるいは市民のなかで新たな宗教文化がどのように立ち上がったのか。本書を貫いて論じられているのは、この 2 つの震災を経験して「立ち直りの道を歩む被災者に対し宗教がどう働けるのか、悲劇を風化させないために宗教はどう貢献できるのだろうか」（15 頁）という問いである。

その問いを明らかにするために、本書は大きく 3 部により構成される。第 1 部では、教団による支援活動の展開を検討し、第 2 部では、宗教者や教団が関わることなく、震災後に生じた市民による宗教的な行事を活写し、そして第 3 部では、阪神淡路大震災後に新たに生じた宗教文化の 20 年経った現在における動向に接近している。

上記のとおり、本書では 2 つの異なる「宗教」を追っている。宗教者・教団を主語とした教団宗教と、市民が自発的に興した宗教文化、の 2 点である。著者自ら「本書の特異点」（10 頁）と述べているように、重点は後者に置かれている。一方で、前者の宗教にも大きな期待を寄せている。そのことは終章において、宗教文化の風化を危惧しながら、宗教者・教団が主体性を発揮できる方法を提示していることからも理解できる。

本書最大の魅力は、阪神淡路大震災後から被災地の「宗教」に関わり続けた著者が、20 年間どのように「宗教」が震災被災地と関与し、そしてどのように「宗教」が変化してきたのかを看取できる点である。それは、2 つの震災後における「宗教」の動態から、被災地・被災者に接する理想の「宗教」とは何か、を一貫して読者に問うているともいえる。

* 大正大学教育開発推進センター・専任講師・t_saitou@mail.tais.ac.jp

2. 本書の概要

まずは本書の概要から紹介しよう。第 1 部は、「大震災と教団」である。第 1 章では、阪神淡路大震災後の教団による救援活動に焦点をあて、教団宗教全般がこの震災で果たした役割と限界を指摘する。教団が実施した救援活動は当時、宗教学界隈で評価されなかったことを例示しながら、「宗教だからこそなしえたことを、私たちは知りたいのである」（26 頁）と本書全体の目的を述べる。

一方、第 2 章では東日本大震災に際して、あらためて教団がどのように救援活動を展開したのかを整理している。ここでも「宗教団体だからこそ行うことのできた寄与に照準を合わせ」（45 頁）、諸教団の活動を列挙している。

そこでは、教団宗教の役割は信仰を中心とした社会統合であると結論付けられるが、それでは非信者はどのようにカバーできるのかと問いを投げかける。これは、20 年前から継続している教団宗教の課題であったが、東北での活動を阪神淡路大震災時と比較した場合、「長期的支援」「心のケア」「連携」の 3 点で異なっているという。この 3 点は教団宗教の新たな成果として評価される一方、教団による宗教者（支援者）のケア、市民の“教団離れ”に対処できなかった現状を、今後解決すべき課題として指摘している。

第 2 部は、「被災者による被災者の救い」である。各章では、被災者となった市民たちが自身らの力で作り出していった「宗教」に着目している。ここで対象となっている事例は「祭り」「巡礼」「灯り」などの「宗教的」な「儀礼」である。それぞれの「儀礼」が作り出す「共同性」がどのように被災地で機能しているのか検討を重ねている。

このような市民主催の催しが実施された背景として、①風化してしまうという震災の記憶の維持を日常ではなく非日常に求めたという点と、②伝統的な教団宗教では宗教的ニーズを満たしてくれないという思いを市民が持っている点を指摘している（108 頁）。

一方で、時が経つにつれて神戸の震災を知る者が少なくなり、「慰霊」の性格が薄れていっているような傾向にあり、著者は「聖なるものの行方が気がかり」（127 頁）であるという。「聖なるもの」の代わりに登場した言葉

が「連帯」「絆」であるが、これらだけでは「儀礼」の存続が危ぶみ、宗教性が薄れた「イベント」へと変化していくのではないかと危惧する。「世俗化」したイベントは「明るさ」「集客」「新規性」などが重視され、被災を顧みて参加者で悲しみを共有するような「儀礼」的要素は後景に退かざるを得ないことを憂慮している（75 頁）。

第 3 部は、「震災記憶の風化のなかで」である。各章では、神戸の被災地が震災から 20 年経過し、どのように変化しているのかを中心に論じている。ここでのキーワードは「心の救済」と「宗教に何ができるのか」である。

まずは教団宗教による支援活動の限界性が指摘されている。そこでは、被災地外の宗教者による支援活動の継続困難性と、被災地の宗教者による支援活動の限定性である。

一方で、市民らが自発的に継続して実施している「祭り」「巡礼」などの催しは、「宗教性の希薄化が看取され」（146 頁）、慰霊追悼を目的とした「宗教儀礼」から、娯楽を目的とした「イベント」へと変容しているという。

年月を経るにつれ、過去の記憶が風化している現状を著者は危ぶみ、宗教者が主体となる「儀礼」の復活に期待する。特に代表的な言葉として、「宗教者の執行する慰霊の儀礼は、過去へと人々を連れ戻す力があろう」（158 頁）、「死を筆頭とする苦難に古来より対処してきた宗教者は、その得手である儀礼にあって、儀礼に与る人々をして、その脳裏に犠牲者の姿をヴィヴィットに描かせることができる」（同頁）、「宗教的な慰霊の儀礼は、犠牲者のイメージを遺族たちの心のなかに鮮明に甦らせる」（179 頁）が挙げられる。つまりは、記憶の風化に対して「儀礼」という「宗教だからこそなしえ」ることを強調すべきだと示唆しているのである。

そして終章では、著者による「それでは教団宗教は何ができるのか」が提案されている。一つに教団の組織力・超宗派による多大な人的資源を活用した支援活動である。教団には資源と人材が豊富であり、それらを融通し合うことができれば、多くの被災者を救うことができるまた、超宗派によって儀礼がおこなわれれば震災の記憶も風化されずに受け継がれるであろう。そして超宗派による活動となれば、メディアの関心も引き非信者の目にも映りやすい。まわりまわって利他にもなれば、自利にもなると提案する。

もう一つに、市民と協働した「儀礼」である。当初は宗教性を帯びた「儀

礼」も徐々に「イベント」化し、参加者の減少・記憶の風化が叫ばれている。そのような危機に、宗教者・教団が関与し、再び記憶を呼び覚ますことができるのではないか。「そうなれば、聖なるものの求心力は回復する。新たな同志を得た集団は、記憶の継承を担う集団となりうる」(220 頁)。以上のような期待が寄せられ、本書は締められる。

3. コメントと質疑

評者は 2011 年に発生した東日本大震災の被災地をフィールドに、大正大学「震災と宗教」研究会のメンバーとともに調査・研究を進めている。まずは、1995 年の阪神淡路大震災後から 20 年もの長期にわたって震災被災地を調査・研究を続けている著者に心より敬意を払いたい。

被災地研究は、人の悲しみや社会に対する絶望に触れることが不可避であり、研究する身にとって心を強く保たなければならないとの思いがある。たとえば、評者の過去の被災地調査において、インフォーマントから「研究をするなどと言って被災地の上澄みを掬っていくのではなく、きちんと支援活動をしてから物を言いなさい」と非難を浴びたこともあった。単なる興味本位のみで、同時代に艱難辛苦を被っている方々と接してはいけないと心から感じている。一方で、そこに共感して熱心に当事者にコミットしてしまうと、学術研究としての客観性を担保できない可能性が高まるのも事実である。

本書は、被災者と同じ目線に立ち、被災者と同じ行動をし、それでもなお冷静にそこにある「宗教」というものを見つけ出して観察し、言語化している。しかも、20 年間という長きにわたって、(主に神戸の) 被災地における宗教性の濃淡を描いている。今後、いや、むしろすでに風化が始まっている東北の被災地も、神戸と同様の事態が起こることが予想される。本書が示した神戸の被災地における 20 年間の変化は、長年フィールドワークを実施してきた著者のみが示すことができる視点と研究成果であろう。

それゆえ本書の最大の特色は、第 3 部に集約されているのではないだろうか。(第 2 章以外の) 第 1 部、第 2 部で神戸の被災地の様子とその後の展開を説明し、そして第 3 部で 20 年後の現状を示す。一つの「催し」について 20 年間の変容を映し出している。

「催し」では、開始当初は確認できた犠牲者の慰霊・追悼といった「宗教文化」の「宗教性」が、年月が経つにつれてあまり見られなくなり、かわりに「連帯」「希望」といった明るいイメージが打ち出されていた。一方で、震災の記憶が薄れていることが非常に大きな課題である。そこへの対処こそ、宗教者・教団が介在できる余地があるのではないか。このように著者は、神戸の被災地の宗教文化における現状と課題を列挙し、そして、それに対する教団宗教の可能性を示している。

東北においても、町会が主催している祭りや、慰霊追悼や防災教育を中心としたダークツーリズムが多く展開されている。また近年は、学校単位の被災地見学・学校間交流、大学生の被災地ボランティア／スタディツアーなども盛んにおこなわれ、記憶の継承が継続的に実施されている。

しかし、そうであっても記憶の風化は免れないであろう。その際、教団宗教は何ができるのか。阪神淡路大震災での経験とそこで得た教訓をもとに、東日本大震災では何をすべきか。これが、著者が本書で一貫して問い詰めたテーマであるが、「宗教と社会貢献」を見つめる宗教学者にも突き付けられた問いということができよう。

一方で、疑問に思った点をこの場でうかがってみたい。本書を評するにあたって評者に期待されていることは、東北の被災地の現状を踏まえた上でのコメントであると考える。そこで得た知見をもとに 3 点質問したい。それは同時に、著者が提示している 3 つの対立軸に関する疑問でもある。

第 1 に理念と現実の対立軸である。つまりは、「宗教」を理念として捉えるがあまり、現実を見る際に大きなギャップが生じていないかという点である。

本書のテーマは、「災害に対して宗教がどう貢献できるのか」であり、やや規範的側面の強さを感じる。ゆえに、結論もその枠組みに当てはめている傾向にある。特に、「宗教性」の有無は、デュルケムやエリアーデなどの理論を援用し、「聖性」の濃淡によって計測されている。その枠組みのみで判断することは可能なのか。

たとえば「祭り」「巡礼」は、震災当初から本当に「宗教性」があったのか。そして、それらは何が要因で（どのような論拠で）「イベント」に変化していったのか。そもそも「祭り」「巡礼」から「イベント」化するというのはどういうことか（おそらくこの点が本書で最も重要な分析概念だと考

える)。そして、「慰霊」や「追悼」の側面が薄くなったと断定する論拠は何か。まず、気になった点がこれであった。

第 2 に宗教者と市民の対立軸である。つまりは、両者をあまりにも対照的なものとして捉えていないかという点である。冒頭で述べたように、本書は阪神淡路大震災後の市民が作り出した「宗教」(宗教文化)を追うことに重点が置かれている。一方で、宗教者や教団については震災直後の緊急時の活動のみに焦点が当てられている。

例えば第 3 章で挙げられた事例(地車祭り、地蔵盆、獅子振り)や、第 4 章で挙げられた事例(震災モニュメント交流ウォーク)に対して、教団宗教は少しも貢献しなかったのかだろうか。関わることすらできなかったのであれば、それはなぜか。終章で教団宗教に提言する場合は、これに関する十分な検証が必要であるようにも思われる。

東北の被災地では、宗教者と市民が協働してイベントや心のケア、追悼を展開している事例を多く確認することができる。たとえば福島県浜通り地方において、2015 年時点で 15 程度の震災モニュメントを確認することができるが、宗教者が自発的に立てた祭壇を、その後市民や遺族が協力して維持に努めた例もある[小林他 2015]。また、市民主催の町づくり会議を積極的に運営している宗教者も存在する。

本書第 2 章でも指摘されているが、東日本大震災後の宗教者の支援活動の特徴として「継続性」が挙げられる。地元宗教者(特に神職・僧侶)であればさらに長年地域に根付いているという「地域性」が備わる。そして、セーフティネットからあぶれたり、公共の福祉を十分に受けることができなかったりする人に対して、より積極的に支援をしている姿も確認できる。これは公共に対する「代替可能性」ともいえる。

ここからわかる通り、宗教者の活動は市民の同様の活動とは一線を画している。ただ、だからといって市民と協力しないというわけではない。むしろ宗教者の方から自発的に市民団体や行政に手を差し伸べ、市民団体や行政も宗教者の協力を求めた事例を多数みられたことが、2 つの震災後を比較し大きく変わったことかもしれない。

第 3 に教団と宗教者の対立軸である。終章では、教団宗教でも教団側の組織力と、宗教界という巨大な存在を軸とした継続的な支援活動に大きな期待が寄せられている。たしかに、それが実現すれば、社会における教団

宗教の存在感は大きく高まるであろう。しかし、実現可能性を考えると現実的ではないのではなかろうか。

一方で、実現可能性の高低で考えるのであれば、宗教者一人ひとりが個々に協力し合った方が、現状では現実的であると考える。第 2 章で取り上げられていた宗教者災害支援連絡会は、宗教学者が媒介となって一人ひとりの宗教者をつなぎ、それぞれが協力しあって支援活動を共有している好例であろう。しかし、著者によれば、宗教者災害支援連絡会に参加する宗教者は「教団を代表しての参加、ではないように筆者には見え」ることから「宗教界を挙げての被災者支援の実現はまだ遠い」(56 頁) と即断している。

また、第 6 章で阪神淡路大震災から 1 年後には宗教者の支援活動は消失していったとの指摘がある。それを宗教者自らが反省し、克服したのかどうかは不明だが、東日本大震災後、宗教者たちは自らネットワークを作り、継続的な支援活動をおこなっている様子が確認できる。たしかにその支援活動は先細りしている面も否定できない。しかし、それでもなお継続して支援活動をしている事例は散見できる。

一宗教者による草の根の活動を継続的に実施していくことから教団が動くこともある［高瀬 2014］。教団のイニシアチブに頼るよりも、一宗教者や自発的な宗教者のネットワークに期待する方が実現可能性としては高いのではないだろうか。あらためてご教示願えればと思う。

4. おわりに

東日本大震災から 3 月で 5 年が経つ。ここまで様々な学問分野から震災に関する多くの研究が生まれてきた。ここ最近では、市井の人々の信仰・宗教文化・霊性などを対象とした研究が世に出ている［磯前 2015,弓山編 2015］。また、宗教学以外の研究領域からの信仰・宗教文化・霊性研究も社会の注目を集めている［金菱 2016,金菱編 2016］。

本書は上記の研究群に対して、東北の被災地と神戸の被災地とを比較しているという大きな利点を持っているだろう。先述のとおり著者は、市民の宗教文化の動向を長年追ってきた。市民の宗教文化の変化を追及するうちにおそらく解明できたことは、いかに「宗教」が現代社会において、さらには被災地の「癒されるべき人々」（15 頁）にとって重要な側面を持って

きたのか（あるいは今も持っているのか）、ということであろう。そのことを絶えず訴え続けているのが本書であった。そのような情熱と焦燥感は、どの頁をめくっても伝わってくる。

評者も現在、福島県いわき市や岩手県釜石市を中心に調査をおこない、宗教者の支援活動およびコミュニティの再（々）構築における宗教者の関与の検討を続けている。

その調査を経て見えてきたものは、地元の宗教者が自分たちの力で継続的に支援活動を運営している姿である。そして、被災地外の宗教者の、断続的ながらも被災地に心を寄せている姿である。これらは決して教団主導ではないケースの方が多い。しかも、その支援活動は宗教者と信者の関係だけで収束することはない。宗教者らは積極的に一般市民、そしてときには行政と協力・折衝し合っているのである。

ここで調査内容を詳しくは述べないが、本書が提示しているように 20 年前とは異なる状況を東北では見ることができる。むしろ、神戸のときの教訓を活かしながら宗教者は動いているのかもしれない。著者が示した課題（特に 2 点目の、市民との協働した「儀礼」）は、実はある面で克服されているのではないだろうか。

地元の宗教者と市民とが協働しながら、そしてお互いが責任を持ちながら「自分の土地」の復興に取り組む。そこからは、新たな「宗教文化」の芽吹きを感じることができる。本書が検討を重ねた「宗教者ならではの支援活動」は 20 年後、いまとはまた異なる展開を見せるのだろうか。

参考文献

高瀬顕功 2014「浄土宗青年僧侶による復興支援とそれを支える力」『宗教学年報』第 29 輯。

小林惇道・君島彩子・弓山達也 2015「いわき市における震災モニュメントの現在と今後」『宗教学年報』第 30 輯。

磯前順一 2015『死者のざわめき―被災地信仰論―』河出書房新社。

弓山達也編 2015『被災地で「いのち」について考える―私大ネット 36 夏 2015 年南三陸スタディツアーAct2 報告―』報告書。

金菱清 2016『震災学入門―死生観からの社会構想』ちくま新書。

金菱清編 2016『呼び覚まされる―霊性の震災学―』新曜社。